

中東フリーランサー報告

(第31回)

中東フリーランサー

<目次>

1. ヒズボラの911
2. 現代の目潰し、通信機器テロと電池爆弾
3. ルトワックの「パラドキシカル・ロジック」
4. 「戦争にチャンスを与えよ」?
5. まとめ(西欧とアラブ)

—————*—————*—————*—————

10月7日、あのハマスの電撃的越境攻撃から遂に1年が経過してしまいました。ここに至る道には4万人以上の死体と10万人の負傷者が横たわっています。ガザは灰燼に帰しましたが停戦の見通しは無いまま、イスラエルはヒズボラとの対決を求めてレバノン侵攻を開始、その延長線上でイランとの対立をエスカレートさせています。これにイエメンのフーシー派も含めれば、イスラエルは実に4正面作戦を繰り広げ、まるで日本の太平洋戦争並みです。しかし当時の日本とは大きな、そして決定的な違いがあります。イスラエルには米国と言う大パトロンが付いていることです。

そう、この戦争を終結させるのは実に簡単です。米国がイスラエル支援を止めれば良いのです。イスラエルは米国と言う武器の海から無限に吸い上げた爆弾の豪雨を降らせる線状降水帯です。海がなくなれば豪雨(爆撃)も止みます。しかしそれでは米大統領が持ちません。ましてや大統領選の最中にはもっての他(「イスラエルは票になるが、アラブは票にならない」:トルーマン大統領)。イスラエルは米国の内政を人質にしてやりたい放題ですが、その行動は決して怒りや思い付きからではなく、かなり以前から入念に準備していたシナリオを、この機会を捉えて敢然実行に移したようです。イスラエルの敵は最早ハマスではなく、ハマスのテロを支持した(だけの)ヒズボラであり、その最終戦争を決意したようです。つまり、ガザの人質奪還はもう眼中には無い……?

本号を執筆中にもレバノン情勢は悪化の一途を辿っていますが、今までの対ヒズボラ作戦と大きく違うのは、ヒズボラ幹部を軒並みかつ迅速に殺害したことです(これに比べハマス幹部殺害はもたつき、10月16日にやっとシンワルを爆殺)。イスラエルは2006年にも大規模なレバノン侵攻をしましたが、こうした斬首作戦はなく、ヒズボラ指導部はむしろ停戦の交渉相手でした。

今回は幹部の一斉殺処分など、まさに本気のイスラエルですが、何故このタイミングなのか。そもそも当初のヒズボラの対イスラエル挑発の烈度は低く、イスラエルがガザ侵攻をやめるまでの姿勢でした(フーシー派も同じ⇒イランも同じ?)。イスラエルが国際世論の非難を無視してもガザ侵攻を止めないのは、名目は人質奪還であり、イスラエル国民の怒りを背にした懲罰行動ですが、

その実はヒズボラへの反撃の形で、ヒズボラ指導部の一掃、つまり、ヒズボラと言うイスラエルの喉元に突き付けられたイランの七首を除去する千載一遇のチャンスだと見ていたとしたら・・・。

もともとハマスはイスラエルの真の敵ではなく、むしろ PLO(アッバス政権)の野望を抑えるカウンターになっていたはず。今回のハマスの襲撃は、イスラエルにとっては言わば凶暴な飼い犬に手を噛まれたようなもので、事故を起こした犬は殺処分です。これに比べてヒズボラはイランそのもので、イスラエルにとっては「キューバ危機」のようなものです。しかし、レバノン国会で大きな政治力も持つヒズボラを、理由も無く攻撃することはできません。そこで今回の事件へのヒズボラの連帯表明を奇貨とし、当初の狼狽から立ち直ったネタニヤフが大戦略レベルの判断で、それまでイスラエル諜報機関が営々と準備して来たヒズボラ壊滅作戦を実行に移す好機とし、自身は「救国の英雄」への道に進むと言う、「転んでもただでは起きない」ネタニヤフ式発想の転換だったとしたらどうでしょうか(単に首相の座死守と言う姑息な段階を超えている)。と言うことは即ち、ヒズボラ壊滅達成がガザ停戦の前提条件、つまりヒズボラ壊滅まではガザ停戦は実現しないと言う理屈になりますが(ヒズボラは停戦を呼び掛けているのに)、皆さんは如何でしょうか。

イスラエルはナスラ師の暗殺では米国すら蚊帳の外に置きましたが、しかしイランとの直接対決には米国の容認が必要です。中東の安定(=油価の安定)を望む大パトロンの米国の意向を無視できない最大の理由は、人口 900 万人のイスラエルが人口 9000 万人のイランと正面衝突することはナンセンスであり、イランとの全面戦争には、米国をイラン攻撃の背面に引きずり込むことがイスラエルの大前提だからだと思います。これ故に(背後に米国の影がある限り)イランは本格的な動きはとれず、また気配すら見せていません(むしろハメネイ師が疎開の情報)。

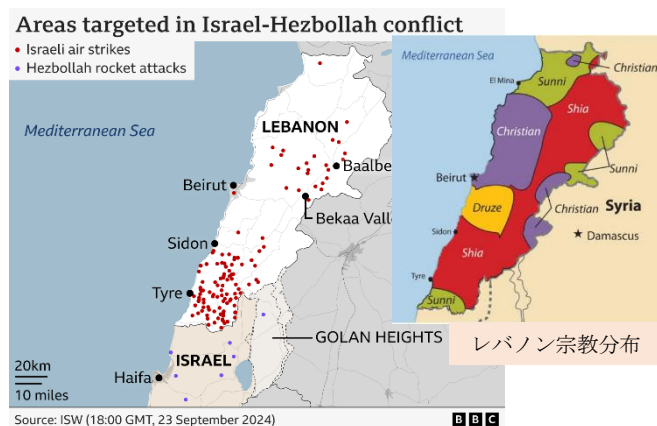
前号では、次の復讐はイランの番であり、攻撃手段のオプションを手中にしているイランが相対的優位にあると書きましたが、その見解は間違いでした。イランの外部環境は悪化しており、新政権による対米宥和どころか、一步間違えれば米国に後ろから刺される危険があります。10月9日にはアラグチ外相がリヤドを訪問、MbS皇太子と面談しました(その後計8か国歴訪)。言うまでもなく、対イスラエル緊張が焦点となっていたことに疑問の余地は無く、サウジアラビアの中立維持とイスラエルの上空通過拒否と中立維持を半ば懇願、半ば恫喝したのではないのでしょうか。

1. ヒズボラにとっての911

さて、今回のレバノン戦線の戦術的転機はご存じのとおり、携帯通信機器の同時多発爆発です。9月17日にはヒズボラが多用するポケベルが、そして翌18日にはトランシーバーが同時多発爆発し、死者約40人、負傷者約4000人の被害を生じ、レバノン中をパニックに陥れました。身近な携帯通信機器が突如同時爆発したのですから当然です。民生機器を大量破壊兵器に転換すると言うのは、まさに民間機を大量破壊兵器にした「911」を彷彿させるものですが、民生機器への信頼を破壊する社会的影響を考えると、さらに悪質と言えます。

今回の事件で特に注目されるのが、死者に対する負傷者の多さです。ガザの爆撃などでは、負傷者は死者の 10 倍程度です。ところが今回は負傷者が死者の 100 倍です。すなわち、死ぬほどではないが多数の人的戦力を削ぐと言う、対人地雷に似た発想の戦術です。負傷者の中で 500 人が失明したと言われます。トルコ紙に登場した外科医は「1 日でこれほど眼球摘出をした経験は無く、死にそうだった。」と述べています。これは爆発時にメッセージを注視していた人間がいかに多かったことを示唆しています。そしてそのメッセージ信号が爆発の引き金となったと思われます。

世評はイスラエル犯行説で断定していますが(他に誰がやると言うのか?)、イスラエルはいつもながら沈黙を守り、言及すらしません。しかし一方でその成果(ヒズボラ通信網マヒ)を見極めたかのように、翌日イスラエル空軍が猛烈な空爆を行い、1 日で死者 500 人を数えました。明らかに周到な準備を感じさせます。右図は BBC 記事の引用ですが、赤点がイスラエル空軍の絨毯爆撃で、右のレバノンの宗派分布(足裏マッサージの分布図みたいですが)と比較すれば一目瞭然で、シーア派地区、すなわちヒズボラの軍事拠点を狙っています。



そして 9 月 27 日のベイルートの猛爆撃で、ヒズボラに 30 年間君臨した指導者ナスラ師も殺されました。襲われた会議にはヒズボラ幹部十数名の他、イラン革命防衛隊の将官(軍事顧問アッバス・ニルフルシャン准将)も居合わせ、全員殺害された模様です。地下深くの会議室を徹底破壊する大型のバンカーバスター(米国製?)の使用は、明らかにヒズボラ指導部の動きを事前に察知していた証拠で、狙いすました作戦です。つまりヒズボラ内部に(乃至はイラン側に)内通者がいたのです。イラン側もその事は気付いていた模様で、爆撃の数日前にナスラ師に警告を発していたとか、ニルフルシャン准将もナスラ師にイランへの亡命を進言に訪れていた等々の推測記事がありましたが、いずれにしても通信システムが機能喪失の状況では、ヒズボラ側は動きが取れず、少し前の諜報情報でもイスラエルの攻撃には依然有効だったことは致命的でした。

2. 現代の目潰し、通信機器テロと電池爆弾

前号の発出と入れ替わりに起きた今回のテロ(ポケベル同時爆発)ですが、多くの読者から見解を求める声が寄せられました。現状ではまだわからないことも多く、しかも関係者(中でもイスラエル)が口を閉ざしている状況下、断定的なことは何一つ言えません。

しかしかつてカナダのリチウムイオン電池メーカー「モリエナジー」に出向した経験から、事件の第一報を聞いた瞬間、特殊信号によるリチウムイオン電池の意図的短絡(ショート)での発火・爆発(熱暴走)を疑いました。リチウムイオン電池は高性能だけにデリケートな面もあり、保護回路

が安全を確保しているのですが、その保安性を逆転させれば、極めて危険な道具になります。

その後の情報によりますと、当該の通信機器は台湾(Apollo)製のポケベル(AR-924、右写真)や日本(ICOM)製のトランシーバー(IC-V82、右下写真)と言われたものの、どうも闇ルートでヒズボラが購入した模造品だったようです。そもそもヒズボラの調達など全て闇ルートでしょう。しかしヒズボラの購入動機を既に察知していたイスラエルが、偽造品メーカーに入り込み(乃至は別メーカーを立ち上げ)、意図的に起爆回路を組み込んだのではないか。かくも組織立ったサプライチェーンの偽装(中間倉庫での組み込み疑惑も含む)には、諜報能力だけでなく、起爆装置のアナログ回路設計にも相当の知識が必要ですから、かなり緻密な計画と情報秘匿が行われた超極秘作戦だったと言えます。



ヒズボラは携帯電話の危険性(位置特定機能)を認識しており、一方向通信で位置を探知されない時代遅れのポケベルを敢えて採用したと言われています(「ポケベルが鳴らなくて」が懐かしい)。携帯電話めがけての自爆ドローン攻撃は、先般のナゴルノ・カラバフ戦線でアゼルバイジャン軍がトルコ製の自爆ドローンを使ってアルメニア兵をパニックに陥れ、アルメニア敗戦の一因となりましたが、この事実をヒズボラも他山の石としたのでしょうか。しかしそれを遥かに上回ったのがイスラエルの諜報能力と工作力だった訳ですが、ヒズボラに携帯電話のリスクを伝えポケベルを推薦したのも、実はイスラエルのエージェントだったのかも知れません。

日頃は寡黙な電池ですが、つまりは化学エネルギーの缶詰で、それはダイナマイトと同じです。爆薬は起爆装置の点火で化学反応を瞬時に起こし、その「爆発的」エネルギー放出が破壊力を生むのに対し、電池は制御された電気化学反応で発生した電気エネルギーを安定的に放出することとの違いだけです。つまり電池も充電したエネルギーを一気に放出すれば大爆発となるのですが、それは電極をショート(短絡)することで起こります(良い子は決して真似しないように…)

<https://www.youtube.com/shorts/5i2KnArGbug?app=desktop>

二次電池の危険性が話題となった最初の事件が、1989年のNTTの携帯電話(まだ初期のもの)の発火事故でした。内蔵したカナダモリエナジー製金属リチウム二次電池が使用中に突然発火し、ユーザーが顔に火傷を負って入院したのです。今回のレバノンの被害者の目撃でも、

- 先ず本部から重要なメッセージが届き、それを読もうとした。
- ポケベルがみるみる内に加熱し、爆発した。

とのことで、現象は似ています。NTT携帯電話の事故は、充放電を重ねるうちに負極の金属リチウム表面に樹枝状の金属結晶(デンドライト)が成長し、反対側の正極に接触する(ショート)ことで発火に至ったのでした。二次電池の熱暴走(発火・爆発)のメカニズムについては、以下の記事がわかりやすく纏めてありますので、ご興味のある方はご覧ください。

<https://monoist.itmedia.co.jp/mn/articles/2209/30/news019.html>

モリエナジー製金属リチウム電池の事故の経緯は、当時 NTT 研究所で金属リチウム二次電池の研究開発に携わっていた山木準一氏(後九州大学教授)のエッセイに生々しく描かれています(以下に掲載)。この事故で二次電池の安全性への関心が高まり、より安全なリチウムイオン電池の開発に繋がって行きました。事故を起こしたモリエナジー社には、再生をめざして三井物産と NEC が深く関わりましたが、私自身も三井物産撤退のしんがりを務めることになりました。

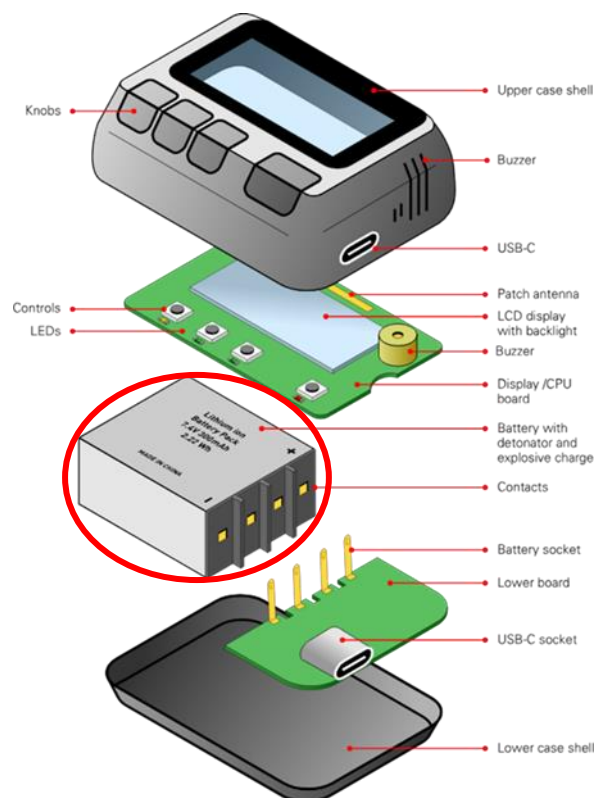
[ja \(jst.go.jp\)](http://ja.jst.go.jp)

[電池への思い \(jst.go.jp\)](http://ja.jst.go.jp)

さて、このように書くと怖い感じの二次電池ですが、現在では安全回路が厳重に保護しており、心配はありません(以下記事ご参照)。ただし、電池の品質そのものに問題が無ければの話です。今やリチウムイオン電池生産の主流は中国で、時々発火事故も報告されています。今回のレバノンの事件を見るに、もし中国がリチウムイオン電池の中に無線起動の秘密のショート回路を忍び込ませていたら、いったいどうなるのだろうかと空恐ろしくもなります。

<https://xtech.nikkei.com/dm/article/FEATURE/20090408/168502/?ST=print>

一方、欧米メディアの初期報道では、ヒズボラ所有の携帯機器に 1~2オンス(28~56 グラム)の爆薬が仕掛けられていたとのことでした。しかしトランシーバーでも総重量 350 グラムであり、50 グラムも爆薬をしかけたら重量チェックで簡単にバレそうなもの。ましてやポケベルは総重量 95 グラムに過ぎず、とてもそんな重量の爆薬は仕掛けられません。右図は今回のポケベル Apollo AR-924 の構造図ですが、筐体内の半分以上を電池パック(赤丸内)が占めており、爆薬を仕掛けるとしたらここしかありません。



この図の出所である cryptomuseum.com なるサイトは、本機の構成詳細、ヒズボラ採用の背景、サプライチェーンの追跡、爆破の状況分析、爆破の原因究明等、なかなかマニアックに論じており、その推測の真否は検証することができませんが、他記事よりは遥かに説得力のある内容です。

<https://www.cryptomuseum.com/covert/radio/apollo/ar924/>

このサイトによると、電池パック内にプラスチック爆薬(Semtex:TNT 火薬の 1.34 倍の威力)が埋め込まれていたとすれば、X 線検査でも探知できなかったであろうと推察しており(ちなみに

Semtex はチェコでの呼び名で、日米の呼称は C-4。本サイトの執筆者はチェコ人のようです)、本来充放電の保護回路(PCM: 電池パックの一部)のはずが、電池から火薬に通電させる信管の機能を果たしたと断定しています。プラスチック爆薬は安定かつ鈍感な性情で、温度・引火・振動では爆発せず、火をつけても緩やかに燃焼する程度なので、起爆には通電が必要とのことです。やはり電池は起爆に使われた模様です。しかし今回の目撃者の、まずポケベルが過熱し、それから爆発したとの証言には、熱暴走の症状も感じられます。この起爆回路には遅延信管的な要素が組み込まれており、被害状況を想定した、高度かつ残忍な設計となっていたと推定されます。

ちなみに、TNT 火薬の少量(50 グラム)での爆発効果を測定した日本の科学警察研究所の実験論文では、促進剤(ブースター)としてプラスチック爆薬を1グラム(5.6J=420mAh)使用しており、この程度の量でも十分な威力があるようです。火薬の爆発エネルギーの測定には「TNT 換算」と言う定義があり、TNT 火薬 1 グラムの熱エネルギーは熱量 4,184J(ジュール)ですが、これはリチウムイオン電池の容量 314mAh に相当します。今回爆発したポケベル AR-924 内臓のリチウムイオン電池は 300mAh(の表記)であり、プラスチック爆薬の点火には十分のエネルギーなのでしょう。ちなみに 300mAh のリチウムイオン電池は、右図(例)のような感じで、厚さは 4.5 mm 程度。前頁図のポケベル AR-924 (厚さ 20 mm)の電池パックはずっと分厚く見えますので、中には相当のスペースが確保できそうな感じの謎の Made in China 電池パックです。



いずれにしても、ポケベル爆破作戦は、ヒズボラにとって致命的な目潰しとなりました。多数のメンバーが肉体的に視力を失ったばかりでなく、ヒズボラの通信機器が信頼崩壊してしまい、組織全体が一瞬で盲目状態となってしまったのですから。それは通信機器に限らず、ヒズボラ所有の機器(兵器を含む)全てへの信用が著しく低下し、安全性の確認を含め、組織の戦闘能力は一時ほぼゼロに近い状態になったと言えるでしょう。イスラエルはこうして身動き取れなくなった獲物を文字通り「据え物切り」の感じでぶった切った形で、まさに画期的戦術によるイスラエルの一方的大勝利と言えましょう。それではこれで決着がつくのかどうか？

3. ルトワックの「パラドキシカル・ロジック」

米戦略国際問題研究所(CSIS)の著名な戦略研究者であるエドワード・ルトワック(右写真)は、煽情的な題名の論文「戦争にチャンスを与えよ」で物議を醸し一躍有名になりましたが、同名の邦訳書(文春新書)を読むと、今回のイスラエルの行動に対するヒントが見えて来る気がします。



ルーマニアのユダヤ人家庭に生まれ、ギリシャ、イタリア、英国、米国と移住を重ね、大戦略家として今を築いたルトワックは、イスラエル軍のアドバイザーとしても活動しています。ルトワック理論を有名にしたのが「パラドキシカル・ロジック」で、それは「戦略に於いては日常の合理的な判断が正解にはならず、成功の積み重ねも次の成功を約束しない。目的地まで直線で最短の道は最

悪の選択となり、連戦連勝も足元を踏み外す危険がある。戦略には敢えて迂回の選択が重要で、それが最も効果を表した場合は敵へのサプライズ(奇襲)となり、サプライズで敵がマヒ状態となれば、その後は通常手段で敵に止めを刺すことができる。」と言うものです。

今回の「ポケベル作戦」は正しくヒズボラに対するサプライズで、パラドキシカル・ロジックを地で行ったような鮮やかさです。これがハマスに対しては、最高幹部のシンワル殺害までに1年超を要した事からも(10月16日)、対ヒズボラ作戦ほどの事前準備は無かった模様です。つまり、ヒズボラこそイスラエル最大の仇敵として、長年秘策を練っていたのでしょう。ハマスのテロもサプライズでしたが、イスラエルはマヒには至らず、結局巡り巡ってヒズボラ攻撃の正当化に使われてしまった感じです。春秋の筆法で言えば、ヒズボラは遂にイスラエルの罠に嵌り、その引き金を引いたのは皮肉にもハマスだったと言うことにならないでしょうか。

しかし戦術的な連戦連勝も、大戦略を間違えれば、戦闘に勝って戦争に負けることになると言うのもルトワックの戒めです。その為には真に信頼でき、かつ十分に強力な同盟国の存在が必要であると論じ、その為には譲歩と忍耐も必要として、第一次世界大戦に臨む英国の対仏露外交政策に言及しています。イスラエルについて言えば、米国と言う強力なパトロンに毒薬を仕込んでおり、誰が大統領になっても支援が断ち切られない構図が出来ています。これに対してアラブ側は「アラブの大義」を叫ぶばかりで、実効性がまるで感じられないのは、まずどちらも軍事的に弱く、安全保障を結局は米国に頼らなければならないこと、そもそもお互いを信じていないことからですが、もうひとつはハマスもヒズボラも、どちらも国を代表しておらず、所詮一非政府組織に過ぎないことも、アラブ諸国の支援もガザの民間人犠牲者への同情以上には発展せず、結局彼らをイランの影響下に押しやってしまったことも、アラブ諸国の責任であろうかと思えます。

逆に言うと、ハマスもヒズボラも国家ではないので、指導部が排除されても組織が消滅したとは断言できません。むしろ指導部を皆殺しにされ、組織を統制できる権力も消えてしまったところに、今後の危うさを感じます。今やイスラエルの明快なメッセージは「誰が指導者になろうが、人質を返さなければ必ず殺す！」と言うもので、交渉の段階は過ぎています。こんな状況に絶望して、残されたヒズボラの大量のロケットに点火されたらどうなるのか。イスラエルはその責任をイランに帰するのか。畢竟イスラエルが米国をどう引き摺り回すかにかかっており、米大統領選挙までの残り2週間、イスラエルはさらにあっと驚く作戦をやらかす可能性があります。

一方パレスチナの本来の代表者であるべきパレスチナ自治政府(PA)はなんら主体性を発揮しておらず、アッバス大統領もハマスの撲滅を嘆いてはいないようです。国連総会演説ではハマスのハの字も出さず、ナクバ(大厄災:1948年のパレスチナ人追放)以来の恨み節を歌舞伎役者のように繰り返すだけで、今日的な議論は全くありませんでした。一方レバノン政府も相変わらずの半身不随で、国連総会での外相演説も、今更ながらに2006年のレバノン侵攻に対する国連安保理決議1701号の履行を訴えるばかりで、これで停戦してくれと懇願してもイスラエルは相手にし

ないでしょう。要はどちらも破綻国家で(PA は国家ですらない)、ロパク政治に墮していると言うのがわかりやすい表現でしょうか。

こうした中、イランは外交戦略で必死です。アラグチ外相は 10 月 9 日のリヤドでの MbS 会談を皮切りに、計 8 か国のアラブ諸国歴訪を果たしていますが、ルトワック流で言うところの真の同盟固めと言うには、なんとも心もとない限りです。これらの国々は皆、年代落ちの米国製武器を磨いていることからしても、この同盟の効力には疑問符が付きます。10 月 22 日から BRICS 首脳会議がロシアで開催されますが、イランがどこまで泣き付けるかが見ものです。(ロシアへのドローン・ミサイル提供がお土産になるのでしょうか、これも結局米国の制裁の論理的帰結?)

4. 「戦争にチャンスを与えよ」?

ルトワックの「戦争にチャンスを与えよ」は、パラドキシカル・ロジックが主題の戦略論ですが、その根底にある彼の生き立ち、戦争と言う社会現象への考察、そして大戦略への展望などは、中東の地政学分析にも多くの示唆を含んでいますので、その概要をおさらいしたいと思います。

まず彼の独特な戦争観は、戦争を倫理道徳的に解釈すべきではなく、戦争を人類の自然現象として理解すべきとの主張にあり、戦争は本来平和をもたらす為にある! というものです。ただし、一方が決定的に勝利し他方が完全に屈伏するか、ないしは戦争当事者双方が疲弊きつて戦火が止んでこそ、初めて真の平和の再建が始まるとしています。前者で言えば第二次世界大戦後の日本やドイツがそれに当たりますが、後者については、ベトナム戦争が真の終戦(講和)に至ったぐらいではないでしょうか。殆どの地域紛争や内戦は、第三者の介入により、停戦はしたが平和は得られない「朝鮮戦争パターン」になるばかりで、平和の建設には繋がらない。そうした仲介と支援を最も無邪気に、しかし犯罪的に行っているのが国連でありNGOだと喝破し、中東戦争は正にその典型だと決めつけています。

すなわち、戦争難民に難民キャンプなどのシェルターを与えるのはもってのほかで、難民は避難先で移民として定着し、新しい生活を始め、幸せに暮らすべきだと主張します。ルトワック自身の半生を振り返っての実感なのかも知れませんが、成功した移民の独善のようにも聞こえますし、目前の惨事と政治的影響に無関心な歴史家の達観のようにも思えます。ルトワックは、ANRWA のような国連機関がパレスチナ難民を難民キャンプに閉じ込めておくから自立更生の芽が育たず、恨みも消えず、狂信主義者ハマスの発生と跳梁を許すことになったとしています。

ただしルトワックは戦争の建設的効果を単に賛美している訳ではありません。彼の主著である「ビザンチン帝国の大戦略」の結論として「あるべき帝国の戦略」とは次の 7 点で、もともと米政府への提言として纏めたものだが、どの国にも応用可能だとしています。曰く、

- ① 戦争は避けるべし。その為の費用は惜しむな。平和が欲しければ戦争に備えよ。
- ② 敵を知るべし。それは定量的な数値だけでなく、むしろメンタリティを把握すべし。

- ③ やむなく戦争となっても大規模決戦は可能な限り避け、むしろ敵の説得を図るべし。
- ④ 消耗戦や占領は避け、機動と奇襲に徹すべし。敵をむやみに殺さず明日の味方にせよ。
- ⑤ 自国に優位なバランスオブパワー構築が最重要。戦時こそ外交を重視すべし。
- ⑥ 政権転覆は最も安価な戦略である。すなわち調略こそ最善の策。
- ⑦ 敵の消耗を急がずむしろ忍耐せよ。急激な変化を求めると新たな敵の出現に繋がる。

なにやら孫子の兵法を彷彿とさせますが、ルトワック先生は短期決着を重視し、降伏ですら「いつかは勝てるだろう」式の根拠なき楽観論よりは遥かに正当な戦略の選択肢としています。

以上はルトワックの著書の斜め読みの整理で、ルトワック先生からは落第点を付けられるかも知れませんが、今後イスラエルが圧倒的勝利を得、ハマスもヒズボラも二度と立ち上がれないほどに壊滅できたとしても、その後にパレスチナ人世界の復興が始まるのか、ましてやパレスチナ国家樹立に繋がるのかと言えば、正直全く見通せません。何故ならば、ハマスもヒズボラも講和の相手と見做していないからです。では破綻国家のレバノン政府、国家にもなっていない PA 政府と言う、全く当事者能力に欠ける連中を相手に建設的な話が可能かと言えば、これも無理でしょう。結局イスラエル主催、米国後援の「パレスチナ戦後政策」の押し付けになるとすれば、その内容は、そもそもそれがハマスやヒズボラを生んだ原因になるであろうからです。

そもそもイスラエル建国を可能にしたのは 1947 年のパレスチナ分割容認の「国連総会決議 181 号」があつてこそ。その恩も忘れて、と言う理屈は今のイスラエルには通用しないのでしようし（マクロンも似たような発言をして炎上中）、ガザの惨状を非難する国連決議の数々に逆切れし、グテレス事務総長を「ペルソナノングラータ」呼ばわりで入国拒否までする始末です。そんなに分割（＝パレスチナ国家建設）が嫌なら、国連総会で（安保理ではなく）この「決議 181 号」を無効にしてやろうか、と言ったらどんな顔をするだろうか、との夢想をしたくもなります…。

もっとも「国連総会決議 181 号」はパレスチナ側にも責任があります。彼らはひたすら硬直的な拒否を繰り返した結果、国連総会で見切りを付けられたからです。「パレスチナ人が二人集まれば三つの政党が出来る」と言う、自己主張と非妥協の性向と、それでいてギリギリで妥協してしっかり儲けると言う絨毯商売式のあざとさが裏目となり、「決議 181 号」は可決されてしまったのです。

今回もハマスは同じ轍を踏み、人質解放交渉では後出しジャンケンでちゃぶ台返しを繰り返し、結局その代償を自らの命で払うこととなりました。ヒズボラも、まさか真の狙いが自分達の首との意識が無いままに、ガザ支援を名目にロケット攻撃の火遊びを繰り返した結果が、ポケベル奇襲攻撃となって跳ね返り、遂には寝首を搔かれる羽目になりました。

5. まとめ(西欧とアラブ)

ルトワックは 1973 年の第四次中東戦争後のインタビューで、「イスラエルが奇襲を受けたにも拘わらず勝利できたのは、世界のバランスオブパワーがイスラエルに有利に働いたからだ。」と述

べています。つまりイスラエルは常に大きな世界観を有し、不測の外乱には耐えられる国づくりをしていたからだと言うのです。それは国民国家としての意識の共有が、過去を背負うユダヤ人社会として一段と強かったからなのでしょう。今回でもひたすら「被害者意識」を剥き出しにして、「生存の権利」を叫んで平然とガザの殺戮を続ける姿にも、その「執念」が見て取れる感じがします。

反対にアラブ側の纏まりの悪さは国民国家の意識の欠如が原因です。それは「預言者の民」アラブがイスラム世界を築き上げながらも、その後の中東ではトルコ、クルド、さらにはモンゴルと言った異民族に支配され、その支配者達はアラブ化しつつもアラブ自体は被支配者であり続けた一千年以上にわたる歴史と無縁ではありません。「十字軍時代、西欧はアラブに多くを学んだ。アラブが西欧から学ぶことは無かったが、唯一学ぶべきことを学ばなかった。それは法制度と権利に基づく国づくりだ。十字軍は中東に来て文字通りの「国家」を作り、王位継承も順調であったが、ムスリム国家は君主の跡目相続で常に内乱を引き起こした。」本レポートでも何度か引用した「アラブが見た十字軍」(邦訳「ちくま学芸文庫」)の著者、レバノンのジャーナリスト、アミン・マアルーフの自省的指摘は、今回も重く響きます。

国民が国家と同質化し、国益を共通認識として外交に当たると言う近代国家の形が、アラブ世界では未だに定着していません。その結果、有効な同盟関係を築き、世界のバランスオブパワーを動かす力を発揮できず(金で釣るか、石油で脅すだけ)、中東に於ける唯一の西欧であるイスラエル(=アラブから見れば現代の十字軍)に手玉に取られてしまうのは、気の毒だが歴史的帰結なのかな、と言う気も致します。そして歴史が示すところ、十字軍の襲来から退去までには 200 年間かかったのです。イスラエルは、まだ建国 80 年ほどでしかありません。

以上